青春のヒマラヤ

ナンガパルバットへの道

遠藤由加

青春のヒマラヤ　ナンガパルバットへの道

平成元年6月16日　初版印刷
平成元年6月22日　初版発行

著　者　遠藤由加
発行者　萩原道彦
発行所　東京新聞出版局
東京都港区港南2－3－13
中日新聞東京本社
振替口座（東京）5－5497
電話 03－740－2674(直通)

印刷・製本　長苗印刷株式会社

定価1,300円(本体1,262円)

ISBN4-8083-0304-3 C0075 P1300E

青春のヒマラヤ

ナンガパルバットへの道

遠藤由加

はじめに——頂上に泳ぐ鯉

ナンガパルバットの頂上に二匹の鯉のぼりが泳いだのは、季節はずれの七月十二日のことだった。

私は頂上にアタックする朝、ダウンジャケットの内ポケットに、小さくたたんだ布製の鯉のぼりを大事にしまいこんだ。そのかわり、行動食のチョコレートを一枚テントの中に置いてきた。荷物を軽くするために。

ピンクとブルーの小さな鯉のぼりは、私が八〇〇〇メートル峰の頂に立つときには必ず一緒に、と持ち続けてきたものだった。

長いヒマラヤ遠征期間中に、一度は無性に日本が懐かしくなり、お母さんの夢を見た。夢の中のお母さんは、いつものように元気に笑っているときもあれば、私のことが心配だと泣いているときもあった。K2遠征のときは「由加ちゃん、頑張ってね。フレー、フレー、由加ちゃん」と応援してくれた。そして、その夢を見た日、一通の手紙とともに、この鯉のぼりがベースキャンプに届いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「由加の納得できる登山ができることを祈ります」

手紙にはそう書いてあった。

私はうれしくて、その鯉のぼりを頬に押しあて「登りたいね、お母さん」と思った。

K2遠征では、その夢はかなわなかったが、いつしか、私の夢とともに、お母さんの夢をかなえることができたらいいなあ、と思うようになった。そうして、その夢は、一九八八年の七月十二日、端午の日から二ヵ月とちょっと遅れてようやくかなえられた。鯉は八一二六メートルの頂に泳いだのだった。

お母さん、THANK YOU AND I LOVE YOU

これは、おてんば娘だった私が、ふとしたことで山を知り、ヒマラヤにあこがれ、何度も失敗やへまをくり返しながら、ナンガパルバットの頂上に立った青春の記録である。

青春のヒマラヤ　目次

はじめに——頂上に泳ぐ鯉　3
山との出会い　9
ベルニナ山岳会へ　18
〝魔の山〟谷川岳での洗礼　34
富士山での悲劇　45
雪の剣岳で　60
失意のローツェ　74
新しいパートナーと再出発　97
改造人間への挑戦　116

アコンカグア登頂　128
試練のK2　141
再起への特訓　166
ミニ・ナンガパルバット＝穂高岳継続登攀　175
落ち込み、そして脱出　190
栄光のナンガパルバット　199
由加のナンガパルバット——跋に代えて　原　真　229
あとがき　239

装丁　相木睦子
地図作成　伊藤年男
写真　著者のアルバムから

山との出会い

〈冒険がしたい〉——私を登山に駆りたてたのは、胸の奥底で熱く燃えるこの炎だった。

もう一メートルも、いや、一歩だって歩けない。だけど、這いつくばってでも進まなくちゃ。そんな限界状況の中で自分がどこまで頑張れるか試してみたい——。高校三年の春、私はこの想いから離れられなくなった。

それまでの私には、ささやかではあるが、心と体を満たしてくれる〝冒険〟があった。それがふと目の前から消え、うつろになったとき、山と出会ったのだった。

——私は横浜で生まれ、育った。横浜といっても海から遠く、どちらかというと、山の中といったところだった。実際、子供の頃は、森の中で木登りをしたり、崖を転がったりしたことしか記憶に残っていない。家のまわりは、本当は丘やただの空地だったのだろうが、その頃の私には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ナシ畑で冒険ごっこ。3歳のとき

奥深く入ったら出てこられない大きな森であり、山であった。基地を作って毎日、毎日、探検する価値のある場所だった。

その山のてっぺんには、おじの作った畑があった。夏になると、トマトやキュウリ、トウモロコシなどをとって食べた。

私には、アイドル歌手の噂話に興じるといった、いわゆる女の子の会話ができなかった。そのため、友達はあまりいなかった。けれど、毎日が楽しかった。自由だった。いつも真っ暗になるまで山の中で遊んだ。兄の影響か、どんな虫だろうと平気で捕まえた。幼稚園のときには、消火器をわざと倒してまわったり、窓から出入りしたりした。母が園長先生に呼び出しをくらったこともある。しかし、そのことで親に叱られた覚えはない。だから〝危ないから、やってはいけない〟ことでも、やりたければやった。心も体も充分満足して育った。物心がついて、そうバカなこともできなくなると、発散させる対象をスポーツに見つけた。

中学のソフトボール部でレギュラーの座をかちとるため猛練習を積んだ

横浜市立六ッ川中学時代は、部活動でソフトボールに打ち込んだ。激しいレギュラー争いに勝ち抜き、セカンド（二塁）の座を保つために努力した。意識してトレーニングを始めたのも、この頃だ。学校での部活動時間のほかに、自分一人で毎日一キロのジョギングを続け、壁にボールをぶつけてゴロを捕る練習や、手の豆のつぶれるまで素振りをした。

神奈川県立大岡高校に入ってからはソフトボールとともに、マラソンに熱中した。というのも、ソフトボール部は部員がそろわず、公式戦に参加することができなかったからだ。大好きなソフトボールで満足できない分、校内マラソンで三年連続優勝し、記録を毎年更新することを目標にして頑張った。目標達成から一週間くらいはうれしさと充実感の余韻

を味わっていたが、しばらくすると無性に毎日がつまらなくなってきた。
進路は就職と決まっていたし、ソフトボール部も引退。何もやることがなくなった。当時、自分の欲求を満たすものが何であるかはわからなかったが、何かをしなくちゃおさまらない気分だった。そこで考えついたのが、〝箱根越え〟だった。非常用のお金を五百円だけ持って、横浜から自力で箱根の山を越えて帰ってくるという計画である。
夏に実行しよう。毛布一枚あればいいし、食べ物はなんとか手に入る。どこの商店街やスーパーでも閉じたシャッターの前に早朝配達されるパンが置いてあるのを知っていたし、多くの家庭には牛乳が配達されるはずだと考えた。
それで飢えをしのぐとしたら、泥棒になるけれど、そのときの私は〝冒険者の生きるための手段〟と考えた。〈グッドアイデア〉なんて思ったりした。
この壮大な(自分ではそう思っていた)プランを友人に話し、一緒にやろうと誘ってみた。〈きっと驚くぞ〉と思いながら。しかし、かえってきたのは、私の期待していた言葉とは違っていた。
「あんたも、もう十八歳なんだから、そんなくだらない計画を一生懸命立てるより、もう少し大人になるために必要なこと考えたほうがいいよ」
同じ歳の人間にそういうことを言われると少々あせりを感じたが、そのときの私に必要だったのは、やはり何かの〝冒険〟をすることだった。

次にこの壮大なプランを打ち明けに行ったのが、高校の現代国語の根本雅司先生のところだった。先生は授業中にいろいろと自分の冒険話をしてくれていたので、「きっとわかってもらえる」と思ったからだ。私はワクワクしながらプランを説明した。

先生は私の計画をバカにはしなかったものの、やっぱりやめた方がいいと言った。「女の子が一人で危ない」とか、「泥棒はまずい」とか……。

私はそれでも「何か冒険がしたい」と騒いだものだから、先生も困ったらしい。

「じゃあ、八月に二泊三日で南アルプスに行く予定だから一緒に行くか」と言ってくれた。

私は山登りのことは何も知らなかったが、少なくとも冒険のイメージにはピッタリときた。

こうして出会った最初の山が、一九八三年の八月に行った南アルプスの仙丈岳から甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山の縦走だった。根本先生と、その友人でやはり別の高校教師の男沢弘先生が連れていってくれた。

それまで、山登りというものが一種のスポーツで、たくさんの人が楽しんでいることをまったく知らなかった。これは、子供の頃親しんでいた〝山〟とはまったく別のものだった。見るもの聞くものすべてがめずらしかった。

初日に仙丈岳へ登り、二日目には仙水峠に荷物を置いて甲斐駒ヶ岳を往復した。それから鳳凰三山へ向かった。

栗沢山を越えるとき、その登りがとても苦しかった。自分の寝袋や衣類だけしか持っていなかったのに、肩や腰が痛くて弱音を吐いた。何回も、もう歩けないと思った。それでもなんとか栗沢山の頭に着いて休憩すると、疲労はすぐ回復し、また歩きたくなってきた。

その日は宿泊地に着くまでに真っ暗になってしまい、男沢先生が地図とニラメッコをしながら進む様子や、自分がヘッドランプをともしながら山道を勇ましく歩くことがすごく楽しかった。

最終日には鳳凰三山にあるオベリスクという岩峰を登った。塀を登ったり、木を登ったりするのは、私の日常生活では当たり前のことだったので、スイスイ登れた。最後の五メートルくらいは急だったので諦めたが、男沢先生はいとも簡単に登っていった。

驚く私に、先生は言った。

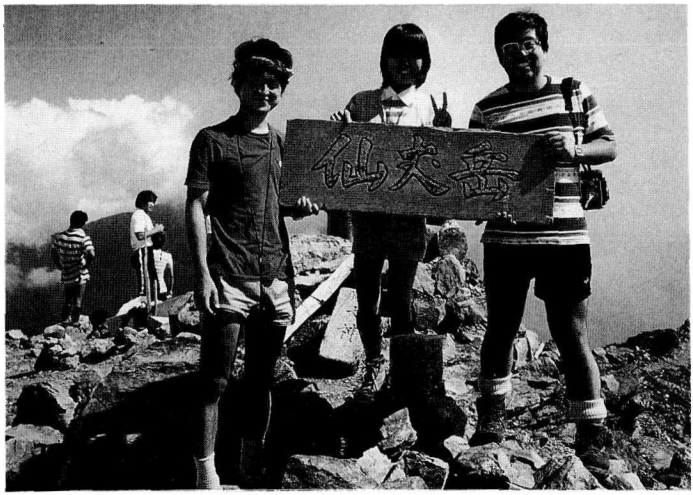
「岩登りも、登山の技術の一つだよ」

山や岩を登るスポーツ——。私は心と体がときめくのを感じた。

〈これだ、これこそ私の求めるものだ〉と。

それ以後、丹沢の沢登りや、岩登りの練習場として知られる鷹取山などへ連れていってもらったが、先生たちは、あまり危ないことや岩登りなどは教えられないと言った。

「もし、ちゃんとやりたいのなら、基礎から教えてくれる山岳会に入ったらいい」と教えてくれた。



仙丈岳の頂上で根本雅司先生㊨、男沢弘先生㊧と

けれども、そのときの私は、ただ山に連れていってもらうだけで充分楽しかった。それで、別段山岳会を探したりはしなかった。

ところが、秋になると「これからは冬山になるから、もう由加は連れていけない」と言われた。「冬山へも行きたい」とせがんでも、足手まといになるからと、はっきり断られた。

そう思われているのがくやしかった。〈絶対、いつか先生より上手になってやる〉と思った。そして一人で丹沢に登りに行こうと思いたち、ガイドブックや小物をそろえた。連れていってくれなくても山へは行ける、という私のせめてもの抵抗だった。とにかく山に行きたかった。

準備万端整って、あとは日曜の朝早く家を出るだけになった。すると、今度は、母が断

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.